

第二章 靈性と現代社会

霊性の喪失と現代社会

日本は豊かで住みやすい国でしょうか。私の研究領域である「ウェルネス」という観点から考えると少し疑問です。ウェルネスというのは、一言でいえば「如何により良く生きるか」を考える領域ですが、つまりは、日本という国は人々が生きがいを持ち生きいきと前向きに暮らしている社会なのか、という疑問です。今の日本は、ある意味とても生きづらい社会のように私には見えるのです。確かに経済的な視点で見れば日本はとても豊かな国で、平均寿命や国内総生産は世界の上位に位置します。しかし豊かさとは、いったい何でしょうか。というのは、世相に目を向けると気持ちが悪くなるような事ばかり目に付きます。例えば、子供社会に見られるいじめの深刻化、陰湿化。青少年犯罪の凶悪化。ニートや引きこもり。世界的にも類を見ない自殺者の数。ヘイトスピーチの横行、などなど。これらの社会問題には、総じて人の「心の在り方」が関連していると言われています。専門家は、このような世相の背景を「蓄財に関わる欲望の充足、つまり物質的な価値観ばかりが優先された結果

として、日本社会の生活水準は向上しつつある一方で、人々の生きる意味や目的意識が失われたのではないかと分析しています。さらに、この生きる意味や目的の喪失はスピリチュアル・ペインと呼ばれ、靈性（スピリチュアリティ）の欠如がこれと深く関連することを指摘しているのです。確かに、今の日本の社会は、物質的生活水準はあるレベルに達しているものの、生きる方向を見出せない人々が沢山迷っているように見えます。面白いことに、今より生活が苦しかったはずの戦時中や戦後の高度成長期には、現在ほど多くの自殺者はいませんでした。それは何故か。答えは簡単で、日々を生きる目的が明確だったからです。生活が苦しいだけで人間はこの人生を放棄するのではなく、生きる目的、目標の喪失が絶望感を生み出すのです。戦時中は戦争に勝つこと。戦後の高度成長期には貧しかった日々の暮らしが豊かになること。これを目指して誰もが明確な生きる方針を持ち、苦しくても必死に働けば良かった。ところが現在、明日のパンを心配する必要は無くなり、生き方も価値観も自由で多様になりました。生き方が自由であること自体は素晴らしいことですが、自由であると言われた時には、自分で目標を定めないと何処を目指してよいか分からない。自由の持つ不自由さです。この「不自由さ」に戸惑う学生たちを、私は沢山見ます。自分の将来像を明確に描けず、悩む学生。そして焦りと共に、周囲の動向に急かされるように就職活動に入って

ゆく学生。そこには、「生きがい」や「働きたい」は見えません。そんな彼らに一番欠けているのは、「自分の好きなことをやって行こう」という姿勢です。自分の得意とすることを、喜びと共にやって行こうとする姿勢です。実はこの「好きなことをやって行こう」という発想は、靈性と深く関わります。靈性の概要は既に述べましたが、その重要な根幹は、過去を悔いたり未来を憂いたりすることなく、「中今」に生きるセンスです。この「中今に生きる」とは、自分の好きなことに没頭し集中している状態を意味しますが、この状態が学生のみならず現代人には足りないと思うのです。縄文の頃、豊かな靈性と共に人々は中今に生きていました。明日のことを心配せず、その日その日を精一杯生きていました。というよりも、所詮コントロールできない明日のことを心配しても、それは無意味だったのです。生活の基本は大自然を舞台にした狩猟採集ですから、大自然の営みや野生生物の動向は大まかな予測はできて、自分でコントロールすることは不可能だったのです。ところが弥生の時代になり、農耕の始まりと共に蓄財という概念が生まれると、人々は明日の生活を心配するようになりました。どれだけ溜め込めば明日は大丈夫か、次の夏は大丈夫か、秋は大丈夫か、冬は越せるのか……。どれだけ溜め込んでも、現状に「足るを知る」ことが無ければ結局安心には至らず際限が無いのです。これこそが私たち現代人の姿です。明日の安定を求めること自体は

悪くないのですが、過度に物質的な蓄財を求めた結果、縄文人がもっていた靈性は失われていった。その結果、人々は常に未来を憂い、「今」に生きることが出来なくなつたようです。これが、現代の学生の動向にも反映されています。彼らは生活の安定を最優先する価値観の下、本当に自分がやりたい仕事よりも、収入の多寡や安定性で職業を選ぶような風潮があるようです。もちろん、ある程度の収入は必要です。しかし安定や収入を求めるあまり、自分の「やりがい」や「生きがい」が蔑ろにないがしされているように見えます。そこには、好きなことに没頭して時間を忘れるような生活を見出そうとする感性はありません。それで、果たして幸せなのでしょうか。少なくともウエルネスという観点から見ると、それは幸せな生き方とは言えないのです。学生のみならず、本来の自分を十二分に生かし、日々喜びを感じながら生きていく人がどれだけいるでしょうか。自分の生活に喜びや幸せを見出せない人は、他者を思いやることも難しいでしょう。だとすれば、それは健全な社会とは言えません。今私たちは自分の幸せのためにも社会全体のためにも、この靈性という価値観をもう一度見つめ直し、これを取り戻すべき時代を迎えているのではないのでしょうか。

スピリチュアルな事象の捉え方

生まれ変わり、降霊現象、憑依、透視、テレパシー、ポルターガイスト、ミステリーサークル、超古代文明、UFO……これらは本来無関係で別々な事象ですが、一般にこれらの目に見えない現象や理解不能な事象を一括りにして、日本では「スピリチュアル」という言葉で表現するようです。霊性を語るとき、これらスピリチュアルな現象、事象に関するテーマを避けて通ることはできません。なぜなら、それらの現象は霊性の一端と深く関わるからです。と同時に、それらのスピリチュアルな現象が「いかがわしい」と否定されることで、霊性全体が否定される傾向にあるからです。ここでは、一般によく知られている内外の代表的な霊的な現象や研究を紹介し、それらの信憑性について考えてみたいと思います。

スウェーデンボルグの千里眼

世界には、靈的現象を真摯に研究してきた歴史があります。それは、スピリチュアリズムと呼ばれる歴史です。この歴史を語るとき、18世紀に活躍したスウェーデン出身のエマヌエル・スウェーデンボルグを外すことはできません。スウェーデンボルグは医学を始めとする多くの自然科学分野で活躍した人であり、同時に神学者でもありました。彼が手掛けた職業はざっと数えただけで、発明家、植物学者、化学者、鉱石分析家、機械技師、音楽家、国会議員、言語学者、水路測量士、鉱山技師、編集者、詩人……と切りがなく、15世紀に活躍したレオナルド・ダ・ヴィンチのような稀代の天才だったことは間違いありません。このように彼の業績は非常に多岐にわたるのですが、ここではスピリチュアリズムに関わる部分のみを紹介したいと思います。なお、彼の靈性研究に関する膨大な研究成果、著作は現在でも大英博物館に保管されています。

スウェーデンボルグは、50歳を過ぎた頃からいくつかの神秘体験をするようになり、1745年、旅先のロンドンで決定的な靈的体験をします。それはイエス・キリストからの啓示で、

「人々に聖書の靈的内容を啓示するためにあなたを選びました」という内容でした。これ以降、彼は20年近く靈界との交流を重ね、その内容は『靈界日記』という書籍にまとめられ、日本でも広く読まれています。これとは別に、聖書を靈的に解釈し直したスウェーデンボルグの思想は『天界の秘義』という全8巻の大書にまとめられましたが、その思想を端的に表せば、「宗教はすべて生命に関わるものであり、宗教の生命は善を行なうことにある」ということになります。(6)

彼の思想に影響を受けた日本人は数多く、たとえば初代文部大臣の森有礼は、スウェーデンボルグの教説に従い、人々が互いに役立ち合う関係で成り立つ「機能的國家」の確立を目指しました。また、『日本の靈性』を著わし日本屈指の仏教学者とされる鈴木大拙も、スウェーデンボルグの影響を受け『天界と地獄』を邦訳し日本に紹介しています。他にも、スウェーデンボルグの影響を受けた邦人として、キリスト教思想家の内村鑑三や作家の夏目漱石を挙げることができます。

ところで、スウェーデンボルグに言及する時、必ず引き合いに出される「スウェーデンボルグの千里眼」という出来事があります。あらまはしは、こうです。1759年7月19日、スウェーデンボルグは旅先のロンドンから帰国の途上、スウェーデン西海岸の都市イエーテボ

りに立ち寄りました。友人、ウィリアム・カーステルの夕食会に招かれたのです。そこには、他にも十五人の客が招待されていました。ところが、食事中スウェーデンボルグは急に興奮し出し、顔面が蒼白となりました。そして、訝いぶかしがる客たちに向かって不安と焦りに満ちた様子で言ったのでした。「今、ストックホルムが大火災に見舞われている。」さらに続けて、一人の友人に向かって「あなたの家は灰になった。私の家も危ない」と叫んだのです。その後しばらく、彼は落ち着かない素振りで部屋を出入りしたのですが、夜8時頃もう一度外へ出て戻って来た彼は大声で言いました。「ありがたい。火は私の家から三軒手前で消えた」と。翌日、スウェーデンボルグは招かれてイエーテボリ市長と面会しています。その時に自分の見た火災の詳細を市長に語ったのですが、その話の内容は、火災現場の様子とぴたり一致していたのでした。

スウェーデンボルグと同世代に活躍した思想家に、『純粹理性批判』などを著した有名なイマヌエル・カントがいます。カントはスウェーデンボルグに対して非常に高い関心を持っており、当時ヨーロッパ中に知れ渡ったこの「千里眼」の話を聞くと、どうしてもその信憑性を確かめたくまりました。そして、自身の手で大掛かりな事実調査を始めたのです。カントは、基本的にスウェーデンボルグの思想を批判的な眼差しで捉えていたのですが、調査

結果はカントをして、「スウェーデンボルグの千里眼は、何よりも強力な証明力を持ち、およそ考えられる一切の疑念を一掃してしまうように思われる」と言わしめたのでした。(a)

スウェーデンボルグは自分が死ぬ日を予言し、その通りの日に亡くなっています。1772年3月29日、夫人と家政婦に看取られながら「ありがとう。神の祝福を祈る」と言い残して、静かに息を引き取ったのでした。

稀代の天才スウェーデンボルグの霊的体験や千里眼。これを皆さんは、どのように考えるでしょうか。現代科学の目では理解しがたいことですが、これらの出来事は紛れもない事実です。

フォックス家事件

スウェーデンボルグの没後約70年の時を経て、近代スピリチュアリズムを生み出すきっかけになる有名な事件が起きました。「フォックス家事件」です。この事件は、なぜ近代スピリチュアリズムの出発点と言われるのでしょうか。それは、生きている人間と他界した霊と

のコンタクトが成立し、会話内容を検証した結果、具体的な証拠によってその正しさが証明されたことにあります。すなわち、他界した霊でなければ知りえない情報が語られ、それが正しいと確認されたのです。言い換えればこれは、死後も何らかの形でその人の意識は存在し続けることの証しとなるのです。それまでは、半信半疑で意識されていた霊魂という存在ですが、これにより論理的にその存在が示されたと理解できるのです。

事件のストーリーは有名で色々な文献に記されていますが、上手くまとめられているウェブサイト^(b)から引用し加筆します。

米国ニューヨーク州ハイズヴィルに住むフォックス夫妻には、マーガレット(11歳)とケイト(9歳)という2人の娘がいました。いつの頃からか夫人と2人の娘は、夜になると不思議な物音やラップ音がすることに気が付き、さらには家具が勝手に動くことを目撃しました。1848年3月31日の晩、またいつものコツコツと窓を叩く音がします。この音にすっかり慣れてしまった下の娘ケイトが、パチンと指を鳴らして「お化けさん、真似をしてごらん」と言うと同じような音がするので、さらに鳴らす回数を指定すると同じ数だけ音が返ってきたのです。

娘たちは面白がって遊び始めたので、夫人が試しに、その場の誰にも答えられないような

質問をしようと思いつき、「私の子供全員（前夫との子供も含めて）の年齢を上から順番にラップ音で答えてください」と言いました。すると即座にすべての子供の年齢が正確に返ってきました。そこで夫人は、「正しい答えをしていますか、あなたは人間ですか」と尋ねました。ラップ音はありません。「あなたは霊ですか。もしそうならラップ音を2回鳴らしてください」と言うと、即座にラップ音が2回鳴って家全体が振動しました。これに驚いた夫人が近所の人を呼び集めたので、大騒ぎになりました。その騒ぎの中、ドウスラーという人が中心になって、アルファベットを早口で言って、霊に望みの箇所を音を鳴らしてもらおうといったことを繰り返し、とうとう1つの通信文を獲得します。それによると、音を鳴らした霊は、5年前にこの家に泊まって住人のジョン・ベルという男に殺されたチャールズ・ロズマという名の行商人で、500ドル奪われ地下室に埋められた、ということでした。それで翌日、皆で地下室を掘ったところ水が出ていったん作業を中止しましたが、その翌年の夏、水が引いたのでその場所を探して掘ると、本当に石灰や木炭とともに、少量の骨と毛髪と歯が出てきました。そして事件から半世紀後の事、通信の通り地下室の壁の間から男の遺体が発見されたのでした。

以上が事件のあらましです。この出来事は、当時一大センセーションを呼び起こし、全米

はおろか外国にもその様子が伝えられました。その結果、多くの人々がこの家を訪れ、フォックス家は衆目に好奇の目に晒されるようになり、引っ越しせざるを得なくなりまし

た。フォックス家の事件は、姉妹がたまたま靈的な能力を備えていたこと、つまりは靈媒体質だったことによってもたらされました。というのは、引っ越し先でもこの姉妹は似たような靈からの通信を受けたのです。そしてこの事件以降、この種のコンタクトは特殊な靈的な能力を持つ者がいれば成立することが分かり、靈との交信や心靈現象を実験的に研究するという道が開かれたのでした。すなわち、交霊会という研究スタイルです。これこそが、フォックス家事件により近代スピリチュアリズムが生まれたとされる所以です。

フォックス家事件以来、スピリチュアリズムの波はアメリカ、イギリスを始めヨーロッパ各地に広がり、20世紀の中ごろまでノーベル賞級の科学者達や著名人も含め、多くの人達により真摯な研究が行われてきました。それと共に、この種の超常的な現象が市民権を得て公然と報告されるようになったのです。

以下、近代スピリチュアリズムの流れの中で特筆すべき事例を掻い摘んで紹介します。

近代スピリチュアリズムを彩る主な出来事

1854年、イギリス社会主義の父と呼ばれる、ロバート・オウエンが交霊会に参加して、スピリチュアリズムをみとめています。ロバート・オウエンは組合運動の先駆けを作った社会主義者で、当時その思想の影響は大きかったのです。

1862年、ホワイトハウスで、リンカーン大統領が交霊会を行いました。リンカーンは、交霊会を度々行っていますが、それによって得られた情報は、彼の思想に影響を与えたと考えられます。

1868年、スコットランドの著名な霊媒ダニエル・ダングラス・ホームが街路上で空中浮揚し、それを多くの人が目撃しています。当時の人は、これをどう見たのでしょうか。彼の示した超常現象を見た著名人は王室関係者を始め数多く、ホームは後に、後述するウィリアム・クルックス博士の研究対象ともなりました。

1874年、真空放電や陰極線の発見で有名なイギリスの著名な物理学者、ウィリアム・クルックス卿は、霊媒フローレンス・クックが持つ物質化霊現象の調査結果を発表し、これ

が事実であると認定しています。なんとフローレンス・クックは、自身の支配霊であるケーティ・キングという霊を物質化し女性として出現させたのです。

イギリスのウィリアム・ステイントン・モーゼスが、霊界からの受信による自動書記で『靈訓』を執筆し1883年にこれを出版しました。『靈訓』は、今でも読み継がれています。

1892年、フランスのシャルル・ロベール・リシエ博士が、多くの霊媒の心霊現象の調査（ミラノ調査）を行い、その結果、彼らには物質化の能力があることを確認しています。また肉体以外で人間を構成する要素の一つとされるエーテル体を物質化または視覚化する半物質を、ギリシア語の *ecto*（外の）と *plasm*（物質）を組み合わせて「エクトプラズム」と名付けました。なお博士は、アナフィラキシの研究でノーベル生理学・医学賞を受賞し、アレギーの父とも呼ばれています。

イギリスの作家であり医師でもあったアーサー・コナン・ドイル卿は、シャーロックホームズの著者として有名です。彼は後年、心霊主義の普及に心血を注ぎ、世界中で講演をしています。大ヒットしたシャーロックホームズシリーズの印税はほぼこの活動に費やされ25万ポンドのお金をつぎ込んだのです。心霊主義こそが世界を救うと考えた彼は、「スピリチュアリズムの聖パウロ」とも呼ばれました。